



ここが知りたかった 在宅ケアのお薬事情 - 薬剤師が答える111の疑問 -

鉄穴口麻里子, 轡基治 編集
(A5判/282頁/2,800円(税別)/南江堂)

2025年までの構築が推進されている、地域包括ケアシステムにおける在宅医療に関する連携体制の中で、保険薬局には医薬品や医療材料等の安定供給と訪問薬剤管理指導による在宅介入が求められている。つまり、かかりつけ薬局の使命を果たす為には、薬局窓口における服薬指導業務から一歩踏み出す必要がある。

在宅に関するテキスト等は数多く出版されているが、本書は、「3つの関門」①服薬アドヒアランス向上を目指す、②処方を見直す、③適切に投与する、で構成されており、在宅でよく問われるお薬の疑問について、実例を元に解説されているのでより実践的である。経験のない薬剤師でも理解できるように、ポイントと用語解説、ワンポイントメモが記載されている。アドヒアランスの確保に関しては、標準的な解説に留まらず、遭遇する

様々なケースに対応できるようになっている。また、何らかの症状が現れた時、それが、薬剤による副作用なのか、あるいは病状変化の兆候なのか等、あらゆる可能性を多方面から示してくれている。執筆されている先生方の豊富な経験が凝縮されている本書があれば、難題解決の糸口を見つける事ができるであろう。

また、本書の重要な役割は、「在宅医療における薬剤師業務の可視化」である。服薬支援、副作用の早期発見、薬物動態学やEBMに基づいた処方提案等、薬剤師の役割は他の医療職には見えにくく、理解しにくい現実がある。薬剤師が何を考えて業務を行っているのかについて、本書を通して看護師等の多職種を理解を得る事ができれば、結果的に、意義のある薬剤師介入、ひいてはスムーズな多職種連携に繋がるという期待が膨らむ。一言で言うなれば、薬剤師が“利用できる”という事を、在宅を通して知ってもらいたい。

本書は、これから在宅を始める薬剤師にとっては、実践的な手引書として、在宅をすでに行っている薬剤師にとっては、参考書として大いに活用できると考える。

(薬局セントラルファーマシー長嶺 稲葉一郎)